

「(6) がんの予防法や早期発見手法に関する研究」
について

厚生労働省健康局
がん・疾病対策課

(6)がんの予防法や早期発見手法に関する研究

前半5年間での成果の例

- ① 個別化予防の実現に向け、大腸がんにおいて、生活習慣や肥満度に加えて、遺伝的なリスクスコアを組み合わせ、10年間で大腸がんに罹患する確率を予測するモデルを構築した。

「統合された科学的根拠に基づく日本人のためのがんリスク評価モデルの開発とその革新的改善に資する疫学研究の推進」
(研究代表者:岩崎基)

平成29年度市民向け成果発表会(要旨集) 22ページ
研究開発課題紹介リーフレット集〔平成30年度企業向け〕 59ページ

- ② 遺伝性腫瘍である網膜芽細胞腫やリンチ症候群、遺伝性乳がん・卵巣がん症候群、及び遺伝性びまん性胃がんを対象に、発がん高リスク群における予防・先制医療に貢献するため、感度・特異度に優れ、遺伝診療の現場で使用できる遺伝学的リスク評価・検査基準の開発を進めている。

「多施設共同遺伝性腫瘍「汎用プロトコール」の臨床疫学的データに基づく、ゲノム情報で規定される超高リスク群捕捉法の確立」(研究代表者:吉田輝彦)

平成29年度企業向け成果発表会「目指すはひとつ 命のために」(抄録集) 37ページ

(6)がんの予防法や早期発見手法に関する研究

委員から事前にご提出頂いたご意見①

	現状と課題	後半5か年の研究の方向性
1	<p>現在、禁煙や適性体重の維持、適正な運動、肝炎治療などがん予防につながるがわかっているものの、必ずしも十分に実践されていない。がん検診の受診についても同様である。これらは自治体の取り組みや本人の行動変容に頼るものであるため、それらを念頭に置いた、行いやすぐ普及させやすい予防方法の開発が必要である。また、健康に無関心な層への健康増進、予防、検診受診率の向上も進んでいない。</p>	<p>(1)生活習慣の行動変容やがん検診、肝炎検査の受診行動を促す方法について、実行性があり、普及しやすい方法 (2)小規模な対象において、RCT等の介入研究により開発した方法の効果の検証(efficacy study) (3)普及の方法の開発及びその実践、普及された場での効果の確認(effectiveness study)等の研究を進める。</p>
2	<p>・がん予防法や支持療法・緩和ケア、精神心理・社会的介入法に関するツール・プログラムは、ランダム化比較試験などで効果が実証されていてもリアルワールドでの普及・実装に直結していない。(D&I 研究が必要) ・薬物療法等診療報酬や要件に直結しない予防法や支持療法、緩和ケア、精神心理・社会的介入法に関するツール・プログラムは、ランダム化比較試験などで効果が実証されていてもリアルワールドでの普及・実装に直結していない。(D&I 研究が必要)</p>	<p>近年急速に進歩し、その手法や評価方法が世界的に整備されつつあるImplementation Science(実装科学)に基づき、がん予防、検診、治療、緩和ケアについて開発されたツールやプログラムに国民、患者、医療者の行動を最適化するための行動変容技術(対話型の援助、監査とフィードバック、ステークホルダーとの協働、マスメディアの利用、金銭的インセンティブ、行動経済学にもとづくナッジなど)を組み合わせエビデンスの普及と実装を促進し、限られた資源を有効活用するための研究を行う。あわせて利用可能で、かつ日本の共通言語となる、行動変容技術の分類法を確立する。</p>
3	<p>療養生活の質の向上のためには、がん患者及び家族における、情報ニーズ、がんの痛み、治療後のだるさやしびれ、不安などの精神心理的問題、就労などの社会経済的問題への取り組みとして、患者、家族、医療者の行動を変容させることで問題解決を図る行動科学的手法が有効との報告がある。</p>	<p>がん患者におけるがん予防・治療・療養の質の向上のための行動科学に基づく行動変容手法を標準化する。本研究により、がんの予防から終末期、さらに健康寿命延伸のための生活様式まで広く生活の質の向上のための行動科学的評価が可能となることが期待される。</p>

(6)がんの予防法や早期発見手法に関する研究

委員から事前にご提出頂いたご意見②

	現状と課題	後半5か年の研究の方向性
5	<p>がんの中でも、特に発見が遅れがちで、かつ5年生存率の低いがんである膵臓がんは早期発見方法が確立していない。膵臓がんの血液等の検体や生体情報の収集が遅れており、早期発見手法の検討を行うために必要なサンプル数を集めるのが大変に難しく、結果として、さらにこの臓器の早期発見技術の確立を困難にしている。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 膵臓がんの特化した早期検出方法の確立(X線、MRI、FDG-PET、血液分析、高感度なマーカーの開発)を集中的に行う研究を進める。 上記と連携し、血液検体の収集を行い、全国的な登録制度の中で、膵臓がんを早期に発見できる体制を作る。
6	<p>内視鏡診断において、非癌病変と識別が難しい早期癌病変を見逃すリスクがある。</p>	<p>識別が難しい病変の発見率を向上させ、早期診断を実現する内視鏡診断支援技術の開発を進める。</p>
7	<p>多機能ナノ粒子が開発されている。</p>	<p>ナノ粒子やダイヤなど新しい材料の診断技術への利用を進め、早期発見手法の開発を目指す。</p>
8	<ul style="list-style-type: none"> 乳がんや胃がん、大腸がんなど比較的予後の良いがんでは、患者は再発防止のために自らできること(食事や運動、代替療法など)に関心が高い。それらに対して、十分なエビデンスがないのが現状である。 がんになりにくい食事、生活スタイル、運動などがあるのかないのか、研究がバラバラに行われていて、全体の統計がわからない中で、個別に行われた調査の情報が発信、プログラムが運営されている。 	<p>前半5年間において、乳がんについては、6000名を超える乳がん患者を対象とした国際的にも評価しうるコホート研究が構築された。コホート研究は臨床試験同様、結果が出るまでに長い時間がかかり、特に予後の良い乳がんなどでは少なくとも5~10年の追跡は必要である。追跡途中でも現状把握など様々なデータを出せると考えられることから、その間、しっかりとサポートすることが必要と考えられる。同様のコホートを大腸がんなど他がん種に広げていくことも必要である。</p>

(6)がんの予防法や早期発見手法に関する研究

第3期がん対策推進基本計画における(6)に関連した記載

- 国は、健康に無関心な層に対して、がんの予防法を周知する方法を含め、効果的な健康増進に関する研究に取り組む。これらの研究の必要性を戦略上より一層明確に位置づけ、関係省庁、関係機関等が一体となって推進する。
- 国は、革新的な診断法や治療法を創出するため、リキッドバイオプシー等を用いた低侵襲性診断技術や早期診断技術の開発、新たな免疫療法に係る研究等について、戦略的に研究開発を推進する。

厚労科研・藤原班の報告書において今後取り組むべきと提言されている研究課題

- ゲノム情報に基づくがん発生のリスク評価とそれに応じた予防、早期発見方策及び次世代のためのがんのリスク評価 [引き続き推進]
- がんの予防介入研究の推進 [引き続き推進]
- 予防可能なリスク要因を回避するための普及・実装科学研究

(6)がんの予防法や早期発見手法に関する研究

前回の会議における(6)に関連する委員からの意見

- 予防においては、喫煙や食事といった観点でのリスク層別化はされてきたが、今後はゲノム解析等により、適切なバイオマーカーを開発することで、新たな層別化による効率的な予防法開発を行うべきではないか。
- 寿命に影響しないであろうがんを見極めるため、予後を適切に予測する方法の開発が重要ではないか。